

氏 名	于 洋
学 位 の 種 類	博士（歴史民俗資料学）
学 位 記 番 号	博甲 第 191 号
学位授与の日付	2014 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	舟山群島における漁村社会の変容から見る女性の役割 － 蟻蟻島の“漁嫂”の暮らしをめぐる－
論 文 審 査 委 員	主査 神奈川大学 教授 小 熊 誠 副査 神奈川大学 教授 森 武 磨 副査 神奈川大学 教授 安 室 知 副査 東京大学 教授 村 田 雄二郎

【論文内容の要旨】

本論文は、ジェンダーと漁村民俗誌に関する理論を基に、中国浙江省における舟山群島新区の蟻蟻島をフィールドとして、漁村社会における女性の労働と自己認識、家族との生活、人生儀礼、廟の復興を主題に定めて実証的に分析し、漁村における女性の役割の変容を考察することを目的としている。

本論文の構成は、以下のとおりである。

序章 問題の所在

第 1 章 調査地の概況と歴史

第 2 章 漁村女性の労働と自己認識の変化

第 3 章 漁村家族生活における女性の役割変化

第 4 章 漁村人生儀礼からみる女性の家庭帰属意識の変化

第 5 章 漁村における廟の復興・祖先祭祀と女性の活動

終章

序章では、舟山群島新区を対象地域にした研究の背景、民俗学における女性研究および舟山群島新区の漁村研究についての先行研究を整理している。また、問題の所在として、中国は伝統的に父系社会であり、親族研究も男性中心に研究がされ、また労働、特に漁村における労働も男性中心に行われてきたという認識に対して、女性の視点に立って女性の漁村社会における役割や自己認識の変化を、中国における解放後の社会的変化を踏まえて検討することを明確に述べている。具体的には、①漁村女性の労働および自己認識の変化、②漁村における女性の実家と婚家での親族関係の変化、③近代以降、女性の帰属意識の変化、④生育、婚姻、墓葬という人生儀礼における女性の役割とその変化という 4 点を研究主題としてあげている。

第 1 章では、舟山群島における漁村社会の形成を古代から現代まで歴史を追って整理した。また、漁業の発展過程は、明と清の 2 度にわたる海禁政策で衰退した漁業が、康熙 23（1684）年の海禁政策解除から漁民が各地から舟山群島に来て定住し、漁村が形成されたことを整理した後、舟山群島の漁業発展過程を解放前の遠洋漁業発展期、解放後の漁業民主改革期、漁業人民公社時代の発展、

改革開放後の生産責任制、漁業の郷鎮企業化、遠洋漁業会社の形成と社会経済史的視点でまとめている。

第2章は、日本における漁村女性の先行研究および中国における女性労働研究を踏まえ、螞蟻島における漁村女性のインタビュー調査をもとに、漁村女性の労働の変容について分析している。伝統的な漁村社会であった螞蟻島では、男性が遠洋漁業に出漁している間は、女性が家事だけではなく農業も行い、女性の労働比重は重かったにもかかわらず、その収入は少なく、男尊女卑の思想が深くあったために、家庭における女性の地位は低く、女性は「牛馬」のように扱われたという認識であったことを実地調査から導き出している。人民公社時代になると、女性は「時間労働点数制」によって収入を得るようになった。その時は、自分のために労働できるという認識を持つことができ、どんなに苦しくても嬉しく働いていたという女性の言葉があり、また解放前は船に乗ることが禁止されていた女性が、女性労働だけによる「婦女号」という船を建造して漁業を行ない、男女平等の社会になったという労働における女性の主体意識の萌芽がみられた。

改革開放後は、生産請負制の下で株式合作制が行われ、企業的な漁業経営が行われる中、女性労働力と男性労働力はほぼ半々であり、女性は重要な労働力として位置づけられるようになった。しかし、漁業資源の衰退により螞蟻島の産業に変化が起きた。1990年代になると、中国政府による農業と観光を結びつけて「農家楽」という民宿が全国的に展開すると、螞蟻島でも釣りなどのレジャー漁業と観光を結びつけた「漁家楽」という民宿が地元政府の経営戦略として展開した。「漁家楽」は、基本的に個人経営で、その経営主体は女性となった。

この螞蟻島における産業構造の変化は、家庭における女性労働の位置づけに大きな変化を与えた。女性は、主婦・母親・労働者としてとても忙しい働き手となったが、女性たちはそれまでの「わき役」から「主役」になったという満足感を得ることができたという。家庭だけでなく、集落においては、婦人連合会の果たした役割が大きかった。婦人連合会は、郷政府に対して男女平等に民主的に運営することや婦女や児童の問題を提案し、とくに託児事業の推進などを推進した。そのほか、婦女労働力創業就業小組を組織して、郷の婦女労働力の総合情報提供をしたり、婦女連合会の成員を中心に「漁嫂（漁家の嫁）余暇芸術団」を組織して、マスゲームやダンスを練習し、各地に公演に行く活動を展開した。

この婦人連合会を中心とした活動は、漁嫂の労働参加を自主的・多角的にしたと同時に、女性の生活全般を豊かにしたと評価されている。

第3章は、螞蟻島における漁家家族の女性の役割の変化をインタビューを交えて検討している。螞蟻島における解放前後の家族は、伝統的な家族形態であり、兄弟は結婚しても分家しないで父親のもとで拡大家族を形成し、女子は婚出するのが基本であった。その中で、嫁は家事と育児、そして農作業を担い、家族の決定権は舅がもち、経済権は姑が握っていた。

人民公社時期は、「一切為公」の集団化政策のもとで「集団利益」が優先され、伝統的な拡大家族の「私人利益」は看過される中、拡大家族は解体され、核家族が生活の中心となった。この変化の中で、婚姻は親の意志による決定から、「婚姻自主」を原則とする婚姻法が成立して、婚姻は個人の自主的な意思によるように大きく変化した。結婚した女性は、人民公社の中で労働点数を得ることができ、家族の中で経済的地位が高くなり、夫婦間の勢力関係が法的には男女平等となり、現実的にもそのように変化した。

改革開放後は、螞蟻島では「漁家楽」が流行り、家族内における女性の経済支配権が大きく伸びた。近年は、「漁家楽」が低迷し、転職するケースが増えている。その中、漁民であっても子供の教育を重視するため、螞蟻島の就学児童は母親とともに島を出て学校のある舟山群島の中心地沈家門に移り住み、母親と就学児童による出稼ぎ別居家族が形成され、島には未就学児童と老親が残さ

れるという家族の分住という形態があらわれている。

解放前後の伝統的家族から、人民公社時代、改革開放後の漁業請負制時代、そして「漁家楽」時代、さらに現代の出稼ぎ別居家族という変化の中で、女性が娘、嫁、姑と家族の中でその地位が変化し、それぞれの時代における女性の役割とその変化について分析した。

第4章は、螞蟻島における人生儀礼を調査し、そのそれぞれの段階における女性の家族内の位置づけを分析するとともに、近年にいたる儀礼の変化と家族内の女性の位置づけの変化を検討している。婚姻儀礼は、農村地域と大きな差は見られず、女性が生家から婚家の成員となることがそれぞれの儀礼として意味づけられると同時に、夫家のために男子を出産することがさまざまな儀礼で表現される。そして、男子を生むまでは嫁は「外来人」という位置づけであったことが示される。それが、近年には結婚と同時に親から独立した夫婦による核家族が形成され、女性の帰属も結婚と同時に夫と対等な成員権をもつように変化した。

誕生儀礼も、改革開放前は男子出産儀礼が盛大に行われたのに対し、一人っ子政策のために男女に差を設けない出産儀礼に変化した。

女性は、夫家での地位が妻から姑に移り、老齢段階になると夫家での帰属意識が強くなる。そして、最終的に葬送儀礼において夫家の祖先として認識され、その時点で生家との関係が切れる。この女性の帰属変化の過程は、農村においても漁村においても変わりはない。ただし、近年は夫婦で沈家門に住んで核家族を形成するケースが多く、結婚してすぐに女性が家族への帰属意識を強くもつように変化している。

第5章では、改革開放後、「漁文化」と関連が深い信仰の対象としての廟が復活し、その主体が女性になっていることを示した。そして、従来、父系親族集団である宗族の祠堂や各家単位の家堂で行われる祖先祭祀は、男性による儀礼であったが、近年は男性が出稼ぎで島に不在の場合が多く、男性の代わりにその妻が祖先祭祀に参加するように変化してきたことを指摘した。

終章では、螞蟻島における漁村の社会的変化の中で、「漁嫂」としての女性の労働と自己認識の変化を分析している。とくに、1980年代に費孝通が農村の発展のためには、農村で農業以外の産業を発展させる「離土不離郷」という構想のもとに小城镇に郷鎮企業という農村工業を発展させた。それを承けて、舟山地区では、「転産転業」という政策を掲げて、漁村の産業転換を進めた。螞蟻島も、海産物の加工や養殖業、船の部品製作工業などが発達し、2000年になるとレジャー漁業と結びついた「漁家楽」が大きく伸びた。その時期に、漁業をやめて「漁家楽」に転換した漁家もあった。さらに、螞蟻島に造船所が建設されると、地元の漁民も造船所に就職するようになり、外来労働力も6500人に増加し、島の社会が大きく変化した。

その中で、螞蟻島の漁村における女性について、中国社会全体の変化の中における螞蟻島の女性労働の位置づけの変化、そして家族の変化、人生儀礼の変化、信仰の変化という多面的な生活の場面をとらえて、女性自身が労働主体としての自己認識の自覚を実現し、家庭における従属的な地位から家庭を半分支える地位を獲得するに至ったことを結論した。

【論文審査の結果の要旨】

全体的な講評として、解放以降の中国における大きな社会変革の中で、女性の社会的な地位と自己認識がどのように変化したかを、舟山群島の螞蟻島というミクロな視点で民俗誌的に記述した点は、近年中国での村落あるいは鎮、県レベルで行われているモノグラフ的な調査研究が多くある中でも、ユニークな視点を持った研究として評価できる。また、本論文に関わる調査の方法として、

現地において 2005 年の修士論文作成時から 2013 年の 9 年間にわたって合計 8 回、約 20 週間の実地調査によって多くのインタビュー資料を収集したことと、現地の地方政府などで舟山群島および嵎蟻島における文書資料を収集したことによって、インタビュー資料だけでなく、資料や統計を使って論述している点も評価できる。

ただ、人民公社時代に女性労働が「労働点数制」によって家庭から社会に反映されるようになり、嵎蟻島でも三八海塘と呼ばれる防波堤を女子労働だけで築いたとか、漁業に女子労働が使われたなどという歴史があるが、それらの既成の歴史の語りを相対化して、その時の女性の語りをさらに深く聞き取って、社会の変化と女性の考えをより深く描いたり、同時に男性の語りも踏まえて、このような女性の社会進出に対して男性はどのように考え、その考えがどのように変化したのかも分析すれば、より立体的な社会変化を描くことができたのではないかと。同じように、伝統的漁村社会において、女性は「牛馬」のように扱われたという言説をそのまま受け入れて論を展開しているが、日本の女性労働研究でも「テーマ」として軽く扱われたという先行研究があるものの、単純にそのように捉えられない部分もある。男女分業論によれば、生産も消費もともに重要な事で、女性の家事労働が生産に関わらないから軽視されていたという既成の一面的な見方でとらえるのではなく、その実態をさらに深く掘り下げるべきではなかったか。民俗学が描いた、豊かな民俗社会という視点もある。それを踏まえて、伝統的社会の実態を捉える必要があるのではないかと。

嵎蟻島における女性に対するインタビューを中心に、女性労働がテーマから労働主体に変化したことを導き出しており、それ自体は評価できるが、それぞれの場面のインタビューをさらに深く、徹底的に聞き取るべきであった。その変化が、いつどのように芽生えて変化に結び付いたかというプロセスをより明確に聞くことが大事である。

また、女性研究者が女性を対象とするから、ジェンダーの視点に基づいた女性民俗誌といえるのか。女性だけを対象にするのでは、その社会における客観的な女性の位置づけができるとは限らない。先述したように、男性の位置づけや男性の言説も踏まえながら、その社会における客観的な女性の位置づけを分析していく視点と方法の発展が今後期待できる。

最後に、中国民俗学において、漁村民俗誌はまだ少ない。日本民俗学では漁村研究は多くある。その成果を援用しながら、中国漁村研究を展開するという意義は認められる。しかし、中国の漁村研究を、中国人留学生が日本で行う意義を客観的に説明する必要がある。その点を指摘した上で、現在、中国は海洋文化研究を発展させようとしており、その点で本論文は大変意義深い研究だと言える。また、本論文は女性労働だけでなく、嵎蟻島における漁村社会の生活全体を対象として女性の社会や家族における変化を分析しており、フィールド・ワークに基づいた実証的研究を実現した点で高く評価できる。

以上の審査結果に基づき、本論文は、研究テーマおよび研究方法の妥当性、論の構成と結論の正統性など博士論文として高い学術レベルにある点において、口頭試問を通して審査員一同の意見が一致した。その結果に基づき、本論文は、歴史民俗資料学研究科の学位請求を十分に満たす内容をもつ論考であり、于洋氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与する事が適当であると認める。